
・ ・ ・ 小春日和。

ひろにか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

・・・小春日和。

【Nコード】

N55540

【作者名】

ひろにか

【あらすじ】

アニメ版の最終話、エピローグ前。藤本は、こばとを介して知り合った琥珀を訪ねる。理由は、医者になった友人の堂元からもらった、とある物にあった。二人はいつかの日のように座卓で向き合い、語りあう。

・・・小春日和。（前書き）

アニメ版『こばと。』の設定で、最終話やクライマックス付近のネタバレを含みます。ご注意ください。エピソード前のタイミングの話なので、主人公が不在です。

・・・小春日和。

陽射しの暖かな秋の日。

そんな陽気には『春』の字を冠した呼び名が有る。

今日は、そんな日だった。

「・・・どうも」

「あら」

来客に対応すべく玄関の戸を引いた琥珀は、そこにあった懐かしい顔に思わず笑みを浮かべた。

「お久しぶりです、藤本さん。どうぞ、あがってってください」

・・・小春日和。

青年は、断ろうとしたのだ。

それを少々強引に家にあげたのは、ふわふわした雰囲気の彼女。言ってしまうば力負けしたたのだ。

無論、この細身の女性と言葉通り力比べをしたわけではない。彼女は精神的な　意思の力というべきか　もので自らの主張を押し通してのけた。

どこか、通じるものがあるように思える。

普段は能天気に見えるのに、時折とても頑固になって、やると決めたことは必ずやり通す。そんな『あいつ』と。

『あいつ』も少し成長すれば、こんな落ち着いた顔もできるようになった・・・のかもしれない。

・・・本当のところはわからない。けれど、きっと。

通された和室で、藤本は勧められた座布団に座っていた。

部屋の中央には、大きめの座卓。その端には、トランプのケースが置いてあった。

取り出そうとしていたところだともいうのか、ケースの蓋は開いている。

見たところ、家には彼女一人のようなのだが。

琥珀は「少し待っていてくださいね」と一旦席を外して、すぐさまお盆に湯のみを乗せて戻ってきた。

予め用意してあったかのような素早さ。藤本が帰る理由を考える間さえ与えてはくれない。

お茶を「どうぞ」と青年に勧めてから、琥珀は彼の正面に腰掛けた。

「ここに来るのは あの時以来か」

「ええ。今日は暖かいとは言え、秋ですから。お風邪をお召しにな

「つてはいけませんから、玄関で立ち話というわけにも」
「そんな大した用件じゃない」

藤本の言葉は素っ気ない。

だが彼は礼儀知らずなわけでも不機嫌なわけでもなく、愛想を振りまく質でないだけだ。

人の態度には基本的におおらかな琥珀は、その様に気を悪くすることもなく笑顔のままだった。

「今日は、？ 一郎さんはお仕事なんです。もうしばらくすれば、帰ってくると思うのですが・・・」

「いや、俺はあんたに用があつて来た」

「私・・・ですか？」

琥珀は首を傾ける。

青年と知り合ったのは、もう何年も前のこと。

けれど、会う機会はそう無い。

話したことも、多いとはいえない（青年の口数が少なめなせいでもあるのだが）。

そもそも直接の友人ではなく、とある少女を介して知り合った二人だった。

藤本は切り出す。

「この前、堂元……栩堂医師と同じ病院に勤めている俺の学生時代の友人なんだが……」

「はい」

「そいつが、バームクーヘンを持ってきた」

青年は、そこで一息ついた。

琥珀は言葉を差し挟もうとせず、彼がまた話し出すのを待っている。

「あれは、あんたの差し金か」

「甘いものはお嫌いでしたか？　そうでしたら、すみません」

はぐらかされる可能性があると思っていた藤本の予想に反して、琥珀は素直に頭を下げた。

気が殺がれた彼は「いや……」と返すにとどまる。

続けての「お口に合いましたか？」との問いにも「ああ……」と締まらない答えが返るだけ。

そんな藤本に、琥珀は更に尋ねた。

「でも、どうしてわかったんですか？　堂元さんからお聞きになったんですか？」

その焼き菓子を琥珀が渡したのは同居人の栩堂？一郎だ。

彼がそれを同僚の堂元に託し、その若い医者友人である藤本に

届けた。

一人前の弁護士を目指して事務所で働いている彼の元へ届くまでには、幾人もの知人を経ている。琥珀からだとわかる直接の要素は無いはずなのだが・・・

「前にも一度、食べたことがあった」

藤本は調子を戻したようで、短く言った。

けれど次に語り出すまで、わずかに・・・ほんのわずかだったが、間があった。

「『あいつ』が持って来たんだ。よもぎ保育園で、バザーをした時に」

琥珀は「ああ、ありましたね」とバザーについての相づちを打っただけ。間については気に止めなかったようだった。

藤本はそれに内心安堵しつつ、言葉が続ける。

「店に出そうとしてたんだが、見たことない包装で・・・俺がどこかの店で買ったのか聞いたら『わかりません』とか言い出して・・・」

その少女との思い出話ができる相手は、目の前の女性以外にはいない。

胸の奥にしまいこんでいた記憶。けれど、不思議と確かな形をと

どめていた。

皆は忘れてしまっている、あの少女のひとつひとつ

「そんな物を売るわけにはいかないから、切り分けた一つをまず俺が食べた」

でも、自分は覚えている。

「藤本さん！」と呼びかける弾んだ声も。「いじわるです・・・」
と拗ねる顔も。

他にも、たくさんのものを

思い出しながら語る、青年の声は優しい。
寂しさも、少しあるのだけれど。

でも、暖かさがそれを包んでいる。

それはまるで、『彼女』のようだと。
琥珀は思った。

「その時のと、同じ味だった」

「そうですね。それで・・・」

得心と懐かしさに琥珀の笑みが深くなる。

その笑顔を見つめて、藤本は本題　わざわざこの家を訪れてま
で聞きたかったことを口にのぼらせた。

「どういつ、つもりだったんだ。あれは」

声の調子は硬いが、怒って問いつめるような口調ではなく。
緊張した、或いはどこか覚悟を決めたような、そんな感情が彼の
顔には現れている。

それとは対照的に、琥珀は自然体で返す。

「藤本さんが最近お疲れのようだと小耳に挟んだものですから。疲
れた時には甘いものが良いと言いますし」

「・・・それだけで、わざわざ？」

彼の愛想の無い顔で言われると、疑っているようにも感じられる
言葉。本当は、ただ戸惑っているだけなのだが。
しかし。

「はい。差し出がましいかとも思っただのですが」

琥珀は彼の真意を誤解することはなかった。
わずかな付き合いではあるが、この青年が誠実な人物であること
は十分窺えた。

それに、『彼女』の大切な人が良い人で無いはずがないと信じて
いる。

そんな人が沈んでいるのであれば、力になりたい。そう琥珀は考
える。

「貴方の元気が無いと知れば、『あの方』も悲しむと思ったんです」

青年は、その言葉を確かめるように繰り返す。

「思った・・・か」
「はい」

首を縦に振った琥珀を見、藤本はひとつ息を吐いて。
そして、小さく言った。

「そうか。頼まれた・・・わけではないんだな」

『あいつ』に。

青年の眉間には、縦に皺が寄っている。

きつと件の少女が見たら、それを取り除くために奮闘するのだろ
う。

今となっては、不可能となってしまったことだが。

彼女は行ってしまった。望んでいた場所へ。
それが何処なのか、藤本は知らず、会いに行くことも叶わない。
探すにしても、手がかりさえ無い。

だから、たかがバームクーヘンひとつで琥珀の家まで来たのだ。

かつて少女がバザーで売り物に、と持ってきた焼き菓子。それは確かに美味しく、また持っていけば園の子ども達が喜ぶだろうと藤本は近所を探した。

けれど、どこの店にも同じものは置いてなかった。

だからこそ、現在の『あいつ』への糸口になるのではないかと思っただが……

「期待をさせてしまったようですね……。すみません」

頭を下げる琥珀に、しかし藤本は「いや」と否定の語を口にした。

「今日は暖かいから……。散歩のついでに寄っただけだ」

それは真実とは言い難いが、琥珀を責めるのはお門違いだ。それがわからない藤本ではない。

「『あいつ』なら、自分で持ってくるはずだ。……。それに、もう俺を覚えていないことも聞いていた」

「ええ……」

転生した者に、かつての生の記憶は無い。

それを藤本に伝えたのは、他でもない琥珀だ。

「それでも、希望を捨ててはいないのですね」

青年の答えを予想しつつ穏やかに言う琥珀に、けれど藤本は言い捨てた。

「・・・未練、だな。可笑しいと、自分でもわかっているんだが・・・」

彼女が行ったのは、望んでいた場所で。

記憶を失ったというのであれば、別れの悲しさも無いということ。何の問題も無い、はずだ。幸せにしている・・・のだろう。

心配する必要は無い。そして、自分は彼女に忘れられている。

それでも、断ち切れずにいる。

理由を問われれば、彼女のためとはとても言えない。

これは、あくまで自分ひとりの

「いいえ」

想いにふける藤本に、琥珀のしつかりとした声が届いた。

彼女は持ち前の優しさから、先の「可笑しい」などという自虐的

な言葉を否定した

藤本はそう思ったが、それは違った。

琥珀は続けて言う。

「貴方のそれは、未練なんかではありません」

口調は静かだが、そこには確信がある。

穏やかな印象の彼女が窺わせる強い意志。藤本が意外に感じるほどの。

そして、琥珀は締めくくった。

「それは 願い、です」

はつきりした口調だった。

しかし皮肉屋の青年は、彼女の意見を素直には受け入れない。

「大して違うないだろう」

藤本の否定にも、琥珀はきっぱり首を横に振った。

「いいえ。違うものですよ」

全く動じること無くなされた返答。

それに押されるように、藤本は黙考し始めた。

願い。

それは、『あいつ』が懸命に追い求めたもの。

いつも明るく元気だった 死んでいたなんて、今でも信じられない 『あいつ』の原点であり、終着点。

自分と『あいつ』に、別れをもたらしたもの。

『あいつ』が願いを叶えなければ、離れ離れになることはなかった。

少女は消えて、それで終わっていた。

そうであれば、いつそ諦めもついたのであるが
いや、待て。

何を言っているんだ？

『彼女』が失われていた方が良かった？ 幸せになれず、消えてしまった方が良かったと？

おかしいだろう、それは。

残された可能性を恨むなど、的外れではないか。
希望を信じることに疲れ、何もかも終わらせたくなった。そんな

自分の都合で、『あいつ』の不幸を望んでどうする。

会いたいのではないのか？ 自分がいなくなつて『あいつ』は幸せにしているだろうに、それでも。

「貴方の胸にある気持ちと、『あの方』の願いは、同じではないのですか？」

琥珀の声が、耳に届いた。

藤本は、それを聞いて思い出す。

あの犬のぬいぐるみ の振りをしていたという存在 は言っていた。

『あいつ』の願いは、大切な人に会うことだと。その人のいる場所に行くことだと。

そのために、コンペイトウとやらを集めていて。
そして、そのコンペイトウを集めるために、この世界に来たのだと。

『あいつ』が願わなければ、俺たちは、会うことはなかった。

では、自分が願えば ？

不意に涼しい風が通り過ぎて、藤本の頭をさましていく。
隙間風が部屋を抜けていったようだ。どうやら縁側の方の障子戸

が完全に閉まっていなかったらしい。

その風に、ケースに収まっていたトランプの一番上の一枚が舞った。

ひらりひらりと空中で回転する。スートの描かれた白地と、鮮やかな色の裏面が視界でちらちらと入れ替わって。

そうして、畳に落ちる。先程のスートが見えていた状態とは逆の、裏返しで。

それを拾おうと手を伸ばした藤本だったが、カードに触れた瞬間、動きが止まった。

彼の脳裏に瞬いたのは、一つのとても単純な答え。

青年は、カードを拾うことなく腕を持ち上げた。そのまま、手で顔を覆う。

酷く唐突に、緊張が解けていく。

体から、力が抜ける。

口元が、緩む。

「どうされました？」

「いや・・・」

琥珀の声は、心配そうと言うより不思議そうだった。

青年の今の状態は見ようによつては絶望を表していると取られかねないのだが、ただ心情を掴みかねているだけのようだ。

藤本は、その姿勢のままで口を開いた。

「『あいつ』の願いがあったから、俺たちは出会った。でも、その願いがあったから、別れが来た」
「そうですね」

青年の言葉を、琥珀は肯定する。藤本は、続けて言った。

「皮肉だな」
「そうかもしれません」

琥珀は、否定しなかった。その表情は、手が邪魔をして藤本には見えない。

「そういうのは、『あいつ』より、俺の得意分野だ」

言いつつ手をどかすと、きょとんとした琥珀の顔が目飛び込んできた。

藤本は今度こそトランプを拾い上げると、ケースに戻した。
天井を向けられたその札は、ハートのエース。

裏の裏は、表。
ひっくり返されて裏になったカード。それを、もう一度返せばど

うなる？

まだ、カードが置かれているのなら、その機会もあるのではないか？

「ありがとうございます」と琥珀はカードを片付けてもらった礼を言う。

それだけしか、言わない。

青年が何を思ったかはわからない。けれど、彼が言わないことを聞き出すつもりはない。

琥珀にすれば、藤本が元気になったのであれば、それで十分だった。

「『あいつ』の願いは叶った。なら、今度は……」

眉間の皺がとれた青年に、琥珀は笑顔を浮かべるだけだった。

* * *

「今日は本当に暖かいですね。お散歩日和です」

しばらく間を置いて、外の景色を眺めていた琥珀がのんびりと言う。

藤本は素直に頷いた。

「『あいつ』なら、きつと喜んで出かけたろうな。よくそうしていた。……今思えば、それもコンペイトウ集めのためだったんだろうが」

藤本の言葉に、琥珀が珍しく「でも」と口を挟む。

「それだけではなく、あの方は心から楽しんでいましたよ」

それは散歩に限らず、全てにおいて言える。

「そうだな。子どもたちの世話も、保育園のためのアルバイトも。いつだって楽しそうだった」

だから背負っているものに気付けなかった……などというのは言い訳に過ぎないのだが。

切羽詰まっていたとはいえ、かつての自分は周りを見ようとしていなかった。それは否定できない。

また眉間に皺が寄りそうになるのを藤本は堪えた。

目の前の女性が気付けば、また消沈したのかと取り違えられるかもしれない。その誤解を解くため、「昔の自分の未熟さを反省していました」などと吐露するのは御免だった。

幸いにも琥珀の目にはとまらなかったようで、彼女は別の話を始

める。

「そういえば・・・よもぎ保育園、再開されたんですね」

藤本は「ああ」と返した。

「俺は、仕事でまだ顔を出せてはいないが・・・」
「行かないんですか？」

これからも。

そんなことを、言外に問われた気がする。

確かに、自分が育った場所ではない。

『あいつ』が笑っていた場所とも違う。

けれど、『あいつ』がいなければ、存在し得なかった場所だ。
誰も覚えてないとしても、それは事実だ。『あいつ』がいた、
かな証に違いない。

だから。

「今度、時間を作るつもりでいる」

短い一言。

でも、それを聞いた琥珀があんまりうれしそうに顔になるものだから、不器用な青年は言い訳のように付け足した。

「沖浦のエプロン姿は、見ものだからな」

季節は秋。

けれど、暖かな日も時折ある。

そんな日は、こう呼ばれるのだそうだ。

・・・小春日和。

終わり

・・・小春日和。（後書き）

以前に自分のブログにアップしたものを投稿してみました。ちょっとしたおまけがあるので、連載小説の扱いになっています。そのため、サブタイトルとタイトルが同じ（本当はサブタイが無い）という妙なことになります。

・・・小春日和、2幕。（前書き）

前話、『・・・小春日和。』の直後、藤本さんが帰った後のお話になります。実は同じ部屋にいたいおりよぎさんがご登場です。でもやっぱり主人公には出番が無いです（笑）。

・・・小春日和、2幕。

藤本を玄関まで見送った琥珀が戻った部屋には、先客がいた。

「琥珀！　なんで俺がいるのに藤本のやつを連れてくんだよお前は？！」

卓上に仁王立ちする彼は、『あの少女』がいおりよぎさん、と呼んだ小さな姿のままである。

彼は、文字通り、先に来た客だった。

藤本が来る前に榊堂を訪れていたいおりよぎだったが、琥珀が青年をこの部屋にあげたために、座卓の下に隠れる羽目になったのだ。

二人が話している間、そこから出られなかった彼は、当然おかんむりだ。

暖かい陽気として流石に肌寒い床の高さから動けず、自分が頼んだ筈のお茶も藤本に振る舞われる、とあつては無理もないだろう。

しかし琥珀はそのあたりには思い至らぬようで、無邪気に尋ねてくる。

「いおりよぎさん、どうして隠れてらしたんですか？　藤本さんが差し入れて元気になったかどうか、確かめるチャンスでしたのに」

「アイツの前に出られねえんだよ俺は！」

愛らしい見てくれに反した低音でがなりたてる青い犬。

傍目には非常識極まりない光景である。シユールと呼ぶべきかもしれない。

けれど琥珀は全くひるむことなく小首を傾げた。

「ぬいぐるみのふりではいけないのですか？」

「前に一度話してからダメなんだ！ もうぬいぐるみじゃねえってことはバレてんだよ！」

その言葉に、琥珀はようやく得心したようだ。小さく笑みを浮かべる。

「そうでしたか。いおりよぎさんったらお茶目さんですね」

「お茶っ！？」

「そうそう、お茶でしたね。今お持ちします」

いおりよぎの驚きの声を見事に取り違え、琥珀はお茶を淹れようと台所へ歩み出した。

「……って待て！ そうじゃねえよ琥珀！」

いおりよぎの叫びは届かなかったようだ。
その背は遠ざかっていく。

『あいつ』のポケもパワーアップしたら、あんなったのだろうか。
取り残された室内で、そんなことを一人思っいおりよぎだった。

・・・小春日和、2幕。

ひゅう、と冷たい秋風が室内を通り過ぎていく。

「何だよこの家、なんでこんな風が抜けんだあ!？」

先ほどの怒りも上乘せさせてより頭に血を昇らせた彼が隙間風の
来た方向を見ると、そこには完全に閉まっていな障子戸。
そのせいで風が吹き込んでいたようだ。

「あー・・・俺が来た時開けたせいか・・・」

自分が原因ということで、彼は渋々怒りを抑えた。
短い脚をちょこちょこと動かし、閉めに行つて戻る。
そうこうしているうち、淹れ終わったお茶を持って琥珀が帰って

きた。

「お待たせしました」

「おう」

散々文句を言っではいたが、それはそれとして大人しく茶をすす
るいおりよぎ。

彼の傍らに置かれた直方体のケースに目をやって、琥珀は言う。

「トランプ、できませんでしたね」

「あー・・・そういや、そんなつもりだったけなあ」

今にも使われようとしていたのに藤本が来たことで出番を失った
カードが、和室で所在なさ気になっているようにいおりよぎには見え
た。

それが自身の感傷なのだとわかってはいたのだが。

いつまでもよその世界にとどまる俺様自身と重ねたってか？
らしくもねえ・・・

吐き捨てるように、思う。

哀愁を漂わせるぬいぐるみの背中へと、琥珀は視線を向けた。

「どうでしたか、藤本さんの様子は。少しは元気になられたのではないですか？」

「ま、ちつとはな」

「差し入れのかがいがありましたね」

「まあな」

短く返す　やはり、口数が少ない　いおりよぎに、琥珀が言葉をかけていく。

実を言うと、差し入れ　藤本に届けられたバームクーヘンを琥珀に渡したのは、いおりよぎなのだ。

しばらく前、かつての同胞が焼いた焼き菓子を手にも、彼は棚堂家へとやって来た。

そして琥珀に頼んだのだ。最近疲れ気味の藤本に届けてほしい、と。

「・・・大したもんだよ」

前置きの無い、いおりよぎの呟き。琥珀は首をかしげた。

「一緒に過ごしたのは、たった四つの季節だったのに、あの野郎は今も・・・」

「そうですね」

彼の弦きの意味することがわかった琥珀も、静かに同意する。

藤本の前から件の少女が姿を消してから、いくつもの季節が過ぎ
ていった。

それを指折り数えるとすれば、両手どころか両足の指まで使った
ところで足りない。

しかも、他の誰にも『あの少女』の記憶は無い。忘れてしまった
方が絶対に楽だ。

にも関わらず、彼は

「そういえば、藤本さんが一度忘れた『あの方』を思い出した理由
いおりよぎさんはご存知なのですか？」

「・・・さあ、どうだったかな。そんな昔のことは覚えてねえよ」

青い犬は、それ以上は言わない。

実際は忘れてなどいないのだけれど、言うつもりがないのか。
本当に覚えていない　あるいは知らないのか。

琥珀にはわからない。けれど、彼女は聞かなかった。

彼が言わないと決めたなら、自分は知らなくてもいいことなのだ
ろう。少なくとも、今は。

そう考えている琥珀は「そうですか」と言うに留めた。次の話題
は、別のことだ。

「あれから随分経ちましたね。そちらはお変わりありませんか？」
「ああ」

いおりよぎの言葉に有るのは、肯定だけ。それ以外の要素は何も無かった。

「そちらは」と問うた琥珀。それは、いおりよぎだけを指しているとも、彼と一緒にいる相手も含めて指しているとも、どちらともとれる。

いおりよぎが最低限の答えに留めたのは、自身の置かれた境遇をまだ明かしたくなかったからだ。

実は琥珀は、いおりよぎが今何をしているのか聞かされていない。人間界の自分の元を訪れることができるのは何故か。どうしていまだに小さなぬいぐるみの姿のままなのか。

それらの疑問への正しい解答は、琥珀の中には無い。

おそらく彼女もいろいろ考えてはいるのだろう。けれど、いおりよぎが何も言わないのであれば、それらは想像の域を出ない。

だが、この件に関しても、やはり彼女は自分から尋ねはしないだろう。

いおりよぎはそれをわかっていて、あえて教えないのだ。

起こることには、全て意味がある。

琥珀はそう信じている。

無意味に見えるとしても、それは目に見えるところに現れていな

いだけ。

起こった出来事が持つ真の意味は、誰もが手にできるとは限らない。時には、意味や理由を計りかねることもある。

そう思うから、わからないことがあっても嘆かない。

時が経てば、その意味はきっと実を結び、目に見えるようになる。そう信じる彼女だからこそ、いおりよぎは告げるのを後に回した。琥珀がいおりよぎの胸のうちを知るのは、最も知るべき相手の次の順番だ。

その日がいつになるのかは定かではない。

一番に優先されている人物でさえ、そこに辿り着く目処すら立っていないのが現状だ。それでも。

「春は、遠いのでしょうか」

琥珀の独り言のような呟き。

けれど、いおりよぎは返事をした。しっかりとした口調で。

「そうだな。次の季節は、冬だ」

今は秋。

今日は暖かいけれど、これからどんどん寒くなっていく。

でも、最後に一言付け加えられた。

「だが、季節は巡る」

コンペイトウが貯まっていようといまいと。

『少女』が青年と一緒にいることを望むようになろうとも。

それでも、時間は止まらなかった。

今も、同じだ。

「ま、遅刻することもあるかもしれねえがな」

肩をすくめ、「冗談めかして言ういおりよぎだったが、不意に声を落とした。

視線が遠くへと向けられる。愛らしいはずの背中が、どこか寂しげに見えた。

「・・・なんでだろうな。何かをしようとしてる時はあつという間のくせに、待つ時には長く感じられてしょうがねえ。一年の長さは変わったらしねえはずなのによ」

「ええ。本当に」

その言葉に、琥珀は同意した。

生まれ変わって、また新しく出会う。彼女は大切な人と、そうした出会いと別れを繰り返している。

別れから出会いまで、長い時を待ったことがあるのだろう。
そんな琥珀の我慢強さには敬意を表しつつも、いおりよぎの思う
ことは変わらない。

「最近になって、俺にはわかったことがある」
「なんでしょう?」

尋ねる琥珀に、いおりよぎはきっぱりと言った。

「俺は、待つのがキライだ」

突然の宣言に琥珀が目をはちくりさせている。それに目をやりつ
つ、いおりよぎは続けた。

「昔の仲間には散々言われた。『待つことを覚える』ってよ。で、
言われた通り待つことができるようになってみて・・・はつきりわ
かった。やっぱり『待つ』なんてのは、俺様のガラじゃねえ」

その嫌がる様は、外見も相まってひどく子どもっぽく見える。琥
珀は思わずくすくすと笑ってしまった。

「なんだよ」

それに気付いたいおりよぎが、ふてくされたような口調で言う。
その様子を見て琥珀は笑いを抑えようとしたが、わずかに洩れ出している。

いおりよぎは眉間に皺を寄せた。先程の藤本のように。

「それでも、待っているんですね」

小さな男は、ため息を吐いた。

「頑張るって決めたヤツがいるのによ、俺様が放り出すわけにいかねえだろ」

けれど、嫌そうな顔はしていない。

「ま、そういうわけだからよ、俺様はそろそろ帰るぜ」

いおりよぎのその言葉に琥珀は「はい」と頷きかけたが、「あ・・・
」と何かを思い出したような呟きが洩れる。

「あ？ まだ何かあんのか？」

その問い掛けに、琥珀は真っ直ぐにいおりよぎを見る。

「……何だよ」

「あの、さっき藤本さんがおっしゃっていたことなんですが……」

「……おう」

琥珀と藤本の会話は、いおりよぎは座卓の下で聞いていた。

が、特に琥珀が気にするような部分は無かったように思うのだが。

藤本のヤツも元気になってたし……

何を言われるのか見当もつかず、疑問符を浮かべるいおりよぎ。

そんな彼に、琥珀は大真面目に言った。

「沖浦さんというのは、そんなにエプロンの似合う方なのですか？」

「はあああああ？！」

想像だになかった台詞に、顎が外れるほどの絶叫が口より出でる。

暖かい秋の日、その日の棚堂家はとてにぎやかだった。

結局、何も聞かなかった琥珀だけだ。

ただ、二人と一体が仲良く訪ねてくる日が来ることを、彼女も願っている。

それは、間違いないことだ。

季節は、秋。暖かな、小春日和の一日。

本当の春は、まだ先。

けれど、冬の後には必ずそれは来る。そのことは、確か。

皆が待ち望む春が、いつ来るのか。

それは、わからない。

けれど、一步一步確実に近づいて来ているのだ。

今、このときも。

終わり

・・・小春日和、2幕。（後書き）

オチが一話目と同じになってしまいました。あの人のエプロン姿は顔が出ないまでも印象深く、個人的には最終話の最注目ポイントでした。その誕生秘話を捏造して長々ブログに書いてしまった熱の入れようです（笑）。再会シーンは・・・目よりも耳が働いてたので！ 歌に心奪われていたので！・・・ってことにしてください（笑）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5554o/>

・・・小春日和。

2010年11月2日12時39分発行